

学校体制への痛烈な批判

社会戯評 横山泰三



(「朝日新聞」1989.10.11より)

引用した横山泰三氏の「社会戯評」は一〇月一日付「朝日新聞」朝刊掲載のものである。

先生が子どもを励まして(?)いる。「もうちょっとだ がんばれ」……がんばれば千円札に手がとどく。

一〇日付同紙の記事——文部省がこのほど発表した一九八八年度「体力・運動能力調査」のまとめによれば、子どもた

ちのからだの柔軟性の低下は特に著しく、今回の調査の結果は過去最悪であった——をモチーフにして描かれたこのカリカチュアは、今日の子育て・教育をめぐる世相、そしてそこにある問題状況の一面を端的に描き出している。下手な解説は蛇足でしかないと思うが、ともかく千円札が利いている。

ところで、新潟市教育委員会が市内の小学校三・六年生八六六人を対象に実施したアンケート調査で、「今、一番欲しいものは何か」という問を出したら、最も多かった回答は「お金」だった、という(「新潟日報」八九・六・一)。

また、NTBテレビ局の調査室の全国の小・中学生を対象にしたアンケート調査においても、同様に「一番欲しいのはお金」という回答が群を抜いていたとして、汐見稔幸氏(東京大学)が次のようにコメントしている。

「(この調査は)一九七三年から八四年までの一〇年間ずっと調査してきたのですが、一九七八年を境にその答が変わっ

てきているのです。以前はラジコンとか人形とか、物がトップを占めていましたが、最近は何女共「お金」です。一九七八年以降はずっと「お金」がトップを占めています。子どもを刺激する商品文化の変化が激しすぎるということもあると思います。子どもたちはひとつの物を手に入れてもそれで満足できるわけがない。一つ物を手に入れば次なる物が欲しくなるという慢性的な欲求不満を持っている。そこで「お金」が必然的に欲しくなる、そういう新しい文化構造のなかに組みこまれていく——これが現代文化の特徴の一つです」(本誌No.二二「ファミコン・テレビ文化と子どもたち」)。

子どもたちが「無限の欲望開発のシテムのなかに組みこまれている」(上掲)現実を鋭くとらえながら、しかしこの絵の風刺の焦点は子どももの側に置かれてはいまい。歪んだ子どもの欲望をかきたてて、「がんばれ」と励まして(?)いる先生——今日の学校体制への痛烈なアイロニーを感じるのである。(か)